

柴田 春光 (しばた しゅんこう)

1901～1935年。秋田県鹿角市出身。本名・良吉。日本画家・川崎小虎(しょうこ)に師事、春光と号する。1923年第4回中央美術社展に初入選。日本画家・錦木清方(かぶらき きよかた)、川端龍子(りゅうし)に賞賛される。1925年第11回院展試作展で日本美術院賞。1928年第9回帝展に《狭布の里》が初入選。以後、同展に出品を重ねる。

秋の一枚

One piece of autumn

「狭布の里」

1928(昭和3)年 絹本着色2曲1隻
160.4×226.8cm 秋田県立近代美術館蔵



村里の生活風俗詩情豊かに

狭い布「狭布」と書いて「きょう」と読む。その字の通り幅が6寸(約18cm)ほどしかないこの布は、錦木村(現在は秋田県鹿角市に編入)の特産品で、飛鳥(奈良時代の税制度では、調・庸(都で働くか地域の特産物や布を納める税の種類)として献納されたほどの古い歴史がある。いつの頃からかは定かではないが、この布を織る娘と男との悲恋を題材にした「錦木塚伝説」が生まれ、次第に和歌や謡曲にも取り上げられるようになり、錦木と狭布の呼び名は全国的に知られることとなった。

作者の柴田春光はこの錦木塚伝説が伝わる鹿角の出身で、故郷の古い呼び名にある「狭布の里」から着想を得て本作品を描いたという。本人が「微細なことまで心境のわくように…写生でなく感情で秋の情趣をアトリエで構成した」と語るように、村里に生きる人々の生活風俗が細やかかつ詩情豊かに描かれている。構図や背景の山並みには、かつて浮世絵展で見たという屏風を参考にした古風な描き方が見られる。一方で、画面にもある布を織っている女性たちや店の軒先に並ぶ野菜や魚、通りを行き来する人々や刈入れの済んだ田の様子などを細部まで描き込んでおり、作者の表現へのこだわりと故郷をいとおしむ繊細な情感が随所に感じられる作品となっている。